はじめに

本国際研究集会は、代表者の伊東が、2011（平成23）年度より、一年間の延長期間も含めて4年間に亘り、「「心身／身心」と「環境」の哲学――東アジアの伝統的概念の再検討とその普遍化の試み」というテーマの下で行ってきた共同研究会の総括や反省、今後に向けての更なる考究のための討論や交流の場として、企画され、開催されたものである。

当該の国際研究集会では、特にこうした趣旨や目的を達成するために、最も相応しいと思われる、内外の第一線の研究者の方々（上記の共同研究会の期間中には、御参加が叶わなかった海外共同研究員の方を含む）を招聘して、より多面的な視座からの検討や再考を行うことを試みた。具体的には、海外からお招きした10名の先生方（国・地域別に中国・5名、台湾・3名、韓国・1名、米国・1名）の御報告を踏まえた討論がなされた。また、その際、東アジアの伝統的な諸概念に関する再検証のみならず、より普遍的な身体論や国際関係論などの現代的な課題に対しても、さまざまな考察が披瀝され、活発な応答が試みられた。委細に関しては、本報告集に就いて、ご高覧を願うものとするが、その結果として、当初の期待以上の成果が得られたものと自負している。

なお、開催時期については、上記の共同研究会の成果報告を兼ねた論文集がほぼ完成し、それを踏まえた検討や議論なども可能となることを期して設定されたものである。因みに、当該の共同研究会の成果報告論集は、実際には、この国際研究集会よりやや遅れて、2016（平成28）年3月に『「心身／身心」と「環境」の哲学――東アジアの伝統的概念を媒介に考える』と題して、別途、汲古書院より、商業出版として公刊されている（http://www.kyuko.asia/book/b221873.html）。ご関心の向きにおかれては、本報告集と併せて、是非とも、ご高覧・ご高批を賜りたい。

さて、本国際研究集会において、海外からお招きした研究者の方々は、代表者の伊東にとっては、多くは旧知の方々であり、招聘者同士の間でも、相互に面識のある方々も含まれていたが、報告内容などに関しては、事前に特段の擦り合わせを行った訳ではなかった。

しかるに、現在の学界を取り巻く諸状況に加えて、広くは世界的・国際的な情勢とも関連してのものかと思われるが、報告者や参加者の興味・関心として、ほぼ二つの大きな問題提起がなされたように見受けられた。

すなわち、先行する内外の中国研究や東洋学が、これまで前提としてきた既存のパラダイムに対する疑義や批判的な観点の提示、次いで、より広

く深い問題の所在としては、西欧近代的な知や現代の国際社会が、暗黙裡の了解としてきた諸前提に対する、果敢な挑戦とも言うべき問題提起や考察が見られた点であり、その意味でも、真に時宜に適った討論や意見交換がなされたものと考えている。

具体的には、とりわけ、張啓雄氏の報告が、現代の国際法的な秩序とは異質な、前近代の東アジアにおける伝統的な世界観や国際関係の在り方を提示して、多くの議論を惹起したほか、東アジアの伝統的な諸概念や心身関係などについては、呉震氏や葛兆光氏の報告などが、新たな視点からの示唆に富む分析を加えている。また、楊際開氏と張翔氏の報告は、ともに丸山眞男らの先行研究を批判的に踏まえて、荻生徂徠を論じながら、その評価に関しては、むしろ真逆とも言える見解を提起して、議論を呼んだ。翻って、徐興慶、呂妙芬、胡明輝、黄海玉、姜智恩の諸氏らの報告も、それぞれの立場から、また、比較史的・比較思想的な観点も踏まえて、中国や韓国・朝鮮、日本に亘る、広く東アジアの前近代や近世の在り方、それに対する先入見などを問いなおす試みとして、大変興味深いものと言うことができる。

このほか、本国際研究集会には、国内外から、総勢で 40 名ほどの方々が参加されて、盛会裡に活発な討議が行われた。

最後になるが、この場を藉(か)りて、ご報告者の先生方はもとより、本国際研究集会に参加された全ての方々に対して、深甚の謝意を表するものである。

また、諸般の事情から、本報告集の刊行が大幅に遅延したことを衷心よりお詫び申し上げる次第である。

伊東 貴之　記